

第4回名古屋大学博物館企画展記録 日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞

Records of the 4th NUM Special Display
“Life of Professor Makoto Saito: pioneer of brain surgery of Japan”

足立 守 (ADACHI Mamoru)

名古屋大学博物館
The Nagoya University Museum, Chikusa, Nagoya 464-8601, Japan

共 催：名古屋大学大学院医学系研究科脳神経外科学講座
会 場：名古屋大学博物館
会 期：平成16年10月13日～11月12日（好評につき会期を11月末まで延長）

はじめに

第4回名古屋大学博物館企画展の主要な展示資料は、2004年秋に名古屋で開催された第63回日本脳神経外科学会総会の特別展示のために、名古屋大学脳神経外科学講座の吉田 純教授、若林俊彦助教授、加藤 香秘書によって集められたものである。これらの資料を基にして、吉田らは「日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞」を編集発行するとともに、齋藤 眞の生涯についての解説パネルを約20枚作成した。これらの解説パネルの大半は、本企画展でも使用された。

この企画展では、齋藤 眞の医学者としての活躍を中心に据えながら、それ以外の面、家族思いの人間、ボートを愛したスポーツマンとしての生き様にも光を当て、関連する写真パネルが数多く展示された。

ごあいさつ

このたび、第4回名古屋大学博物館企画展として、『日本脳神経外科学の開拓者齋藤 眞』を、博物館と大学院医学系研究科脳神経外科学講座との共催で開催する運びとなりました。この企画展は、2004年10月6日～8日に名古屋国際会議場で開催された第63回日本脳神経外科学会総会での特別展示に引き続いて行われるものです。

名古屋大学医学部教授であった齋藤 眞先生(1889～1950)は、我が国の脳外科学・脳神経外科学のパイオニアで、世界をリードする多くの優れた研究を行うとともに、後継者の育成、脳神経外科学会の創



図1 第4回企画展チラシ

設、医学教育、名大医学部の再建、救急医療等に全力投球されました。しかし、過労による心筋梗塞のため、戦災で壊滅的な打撃を受けた医学部の再建を前に、1950年1月にこの世を去りました。

齋藤先生の七回忌に出版された思い出の記「齋藤 眞（同心会編）」には、天真爛漫で人間味あふれる齋藤先生の人柄に多くの人が惹きつけられ、これが齋藤外科の原動力になっていたことが、様々な人から語られています。学問だけでなく、自然・人・家族・芸術・スポーツを愛した齋藤先生は、長く名大ボート部の部長として、スポーツを通しての学生指導にも尽力されました。

映像を用いた医学教育に特別の情熱を持たれた齋藤先生が、1940年（昭和15年）に撮影させた脳手術の16ミリフィルムが、2004年5月に武田薬品工業(株)の資料庫から発見されました。戦災で焼失したと思われていたこのフィルムには、当時の脳外科学分野の最先端技術を駆使した齋藤先生の脳腫瘍手術の様子が、本人の解説とともに鮮明に記録されています。この貴重な医学映画フィルムが2004年の9月に武田薬品工業(株)から名古屋大学博物館に寄贈されたのを期に、映像の一部を会場で一般公開することにしました。

人間 齋藤 眞の生涯をたどるこの企画展が、医学・医師・大学教育の原点を見つめ直すきっかけになればと思います。企画展の開催に当たり、多大なご協力をいただきました関係各位、とりわけ齋藤喜九雄、齋藤玲子、齋藤和子の皆様方に、心からお礼を申し上げます。

2004年10月13日

名古屋大学博物館長
足立 守

名古屋大学医学系研究科教授
吉田 純

各コーナーの解説

導入コーナーには、齋藤教授の脳手術風景を記録した油絵が展示された。この100号の油絵は齋藤外科所属の外科医の所 輝夫博士によって製作されたもので、現在も名古屋大学医学部図書館の閲覧室に展示されている。

コーナー1：齋藤 眞博士の主な業績

(1) 脳血管撮影法の確立

齋藤 眞の代表的な研究で、ノーベル賞を受賞したポルトガル・リスボン大学のモリス教授とその成果を競った。1924年に気脳撮影、1931年に脳血管撮影、1933年に神経撮影に成功。造影剤「ロンブル」（「リピオトール」乳剤）を創製し、血管撮影に一大革新をもたらしたことは特筆に値する。海外からも高く評価された。

(2) 日本脳神経外科学会の創設

昭和23年5月に日本外科学会が新潟市で開催された時、新潟医大の別会場で第1回日本脳・神経外科研究会を開き、日本脳神経外科学会の創設を実現させた。初代会長に就任後、会長の要職を務め、学会誌「脳と神経」の創刊にも尽力した。

(3) 脊椎麻酔の発展

現在も、医療の現場で脊椎麻酔薬として使用されている「ペルカミンS」は齋藤外科の研究から生まれたもので、「ペルカミンS」のSは齋藤（Saitoh）の頭文字に由来する。

(4) 輸血法の確立

悪性腫瘍摘出の外科手術時の死亡率が50%にも及んでいた昭和初期に、輸血法を確立し手術関連死

の減少に貢献した。採血や献血のための新規医療機器の開発にも力を入れ、安全な輸血法の確立に貢献した。

(5) 救急医療の実践と名古屋市への救急車の導入

ヨーロッパに留学中、ウィーンにおける救急医療体制を学び、帰国後、救急隊の体制整備とその教育に尽力した。その結果、昭和9年7月に名古屋市に初めて救急車が配置され、救急医療が開始された。

(6) 医学映画の作成と普及

昭和の初め頃から、医学教育の教材として多数の外科手術映画を撮影。医学映画研究会が創設された時には自ら会長となり、医学映画教育にも貢献した。手術風景を大画面で写し出す最新鋭の器機を用いた講義を他に先駆けて行った。

(7) 名古屋大学関連病院の全国的な展開

名古屋大学で育った医局員を、派遣要請を受けた病院へ赴任させ、日本の外科医療の充実を図った。中部地区だけでなく、秋田や徳島等にも多くの拠点病院を置き、江南の昭和病院などの創設にも尽力した。

(8) 医学部附属病院長として戦後の復興に尽力

第二次世界大戦後、名古屋大学医学部附属病院の初代病院長として、文部省等との交渉に全力を傾けた。また、復興のための資金援助確保に、医局員を同行させ、医学映画を上映して寄附金を集めた。

(9) 東海外科集談会の創設

昭和22年5月に名古屋外科集談会を東海外科集談会に改め、愛知・三重・岐阜・静岡・長野の熱心な外科医によって組織された東海地方の学会を創設し、外科医療レベルの向上に努めた。

コーナー2：齋藤 眞の生涯

齋藤 眞の略歴から始まる展示パネル19枚により、医学者・教育者であった齋藤 眞の生涯を解説するとともに、主要な展示品の意味が分かるように工夫された(図2)。このコーナーは、略歴、幼少～少年時代、中学・高等学校時代、東京大学医学部時代、愛知県医学専門学校時代(ヨーロッパ留学を含む)、愛知医科大学時代、名古屋帝国大学時代、第二次世界大戦、終戦後の復興・激務から急死に至るまで、から構成されている。

主要な展示品は以下の企画展のチラシにリストアップされている。

第4回企画展のチラシ(原稿)

名古屋大学医学部教授であった齋藤 眞(1889～1950)は、我が国の脳外科学・脳神経外科学のパイオニアであり、世界をリードする多くの優れた業績をあげるとともに、弟子の育成にも全力投球しました。しかし、道半ばにして、昭和25年1月に現役のまま61才で亡くなりました。

齋藤先生が1940(昭和15)年に教育用に特別撮影させた脳手術の16ミリフィルムが、最近、武田薬品(株)の資料庫から発見されました。この貴重なフィルムには、当時の脳外科学分野の最先端技術と齋藤先生の卓抜なメスさばきが、解説とともに記録されています。

この企画展では、医学者齋藤 眞の生涯と研究業績、および第二次世界大戦をはさんだ激動期の名古屋大学医学部の歴史を写真等の資料から振り返ります。

主要な展示品は以下のようです。

●和紙に書かれた齋藤家の記録

- 少年時代から名古屋大学時代までの写真
- 父 齋藤蔵之助が中学生の齋藤 眞に与えた頭蓋骨（日露戦争で死亡したロシア兵のもの）*¹
- 昭和 15 年撮影の脳手術の 16 ミリフィルム，およびその DVD（展示会場で一般公開）
- 脳手術に関する新聞（新愛知）記事
- 齋藤先生の脳手術図（100 号の油絵）
- 中国政府から贈られた端溪硯*²

コーナー 3：齋藤 眞の使用した手術道具および脳手術の 16 ミリフィルム

この企画展で最も注目を集めたのは、1940 年に撮影された脳手術の 16 ミリフィルムである。このフィルムは長く武田薬品㈱の資料庫に眠っていたが、2004 年に発見され、企画展を機に名古屋大学博物館に寄贈された。このフィルムから編集された DVD 映像が展示会場で一般公開された。

この脳手術映像を含む齋藤 眞博士の生涯についての解説映像は、主要な業績の解説パネルおよび数枚の写真パネルとともに、現在も博物館展示室の一角で一般公開されている（図 4）。



図 2 展示風景

東京大学医学部から近藤外科へ

明治 44 年、東京帝国大学医学科に入学。

授業を受ける時には必ず最前列の中央部に陣取り講義に臨んだ。眞は解剖学の授業の際には父から送られた頭蓋骨を自分のそばに置いて講義を聴くのを慣わしとした。ある時、当時の解剖学の教授小金井良精博士にその頭蓋骨の由来を聞かれ、眞が「これは貫通銃創を受けたロシア兵の頭蓋骨で、私の父が日露戦争で得たものです」と答えたので教授はその珍しい頭蓋骨を解剖室に寄付しないかと誘い、その代わりに眞はアイヌ人の頭蓋骨標本を教授から受け取った。以後眞の手元には必ずこのアイヌ人の頭蓋骨が置かれることになった。この交換された二つの頭蓋骨は眞を脳外科の道へと向かわしめた象徴的な存在である。

大正 4 年 9 月の「実験医報」に「外傷性脳出血の一例」と題する論文が掲載された。著者は齋藤蔵之助・齋藤眞共著である。これが眞の処女論文である。父・蔵之助が眞にいかに細やかな指導を施して期待をかけ、また眞が後に脳外科という道を選ぶにあたって父の存在がいかに大きかったかがうかがえる。



▲東大医学部時代

図 3 東京大学医学部時代（日本脳神経外科学の開拓者）

*注 1 この頭蓋骨標本は最初の約 1 週間は展示されていたが、2005 年が日露戦争 100 年にあたることもあってロシア人の感情を考慮し、途中からは頭蓋骨の写真に変更された。

*注 2 端溪硯の裏面には、1944 年 3 月に名大附属病院に入院して治療を受けた汪兆銘の名前が刻まれている。この汪兆銘に関する治療記録も企画展の時に公開された。



図4 現在の齋藤 眞コーナーの一部

企画展関連の特別講演会

日時：2004年10月22日(金) 午後3時から

場所：名古屋大学博物館3階講義室

講師：吉田 純（名古屋大学大学院医学系研究科教授）

講演タイトル：脳神経外科医療の歴史と進歩

謝 辞

企画展終了後に、齋藤 眞博士の写真、色紙、手紙類等の多くの貴重な品々が、齋藤喜九雄氏から名古屋大学博物館に寄贈された。この紙面を借りて心からお礼申し上げる。

文 献

名古屋大学大学院医学系研究科脳神経外科学教室（編）（2004）日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞，69p.